紫家七論

湖東十林會章

紫家七論 附系圖

目録

才德兼備
七事共具
修撰年序
文章無雙
作者本意
一部大事
正傳説誤

藤原為章撰

米原

紫家系譜

良門　閑院左大臣冬嗣公第六子　内舎人正六位上　贈太政大臣正一位

利基　従四位上右中将

兼輔　従三位號堤中納言　歌人

雅正（マサ）　従五位下刑部少輔　雅作推誤

為頼　従四位下太皇太后宮亮　母右大臣定方女　歌人

伊祐　従四位下讃岐守

頼成 後四位下因幡守
實具平親王男

今按紫日記云中將の家にて乃至事とあるよりかく
そなたのかたにまかりてかりてつねにまかりよりと
式部の中將文具平親王にまかりたりし由緒なり

為時 五位下越後守或作越前守
儒者 歌人

惟規 イヅノリ 從五位下式部丞
母常陸介為信女

紫日記云このころ式部丞としよりの人のつくりたる史記とりて文
よみはべりしに云々
後拾遺集云父のもとふ越後なる国へまかりけるよ云々
又云父乃許より越のほるはべりけるに云々
新和撰集云友の所のぶのりの越後へくだりけるに云々
新後拾遺より越後へそうとしらと云々

惟通 從五位下 安藝守

定暹 阿闍梨

女子　紫式部　母同惟親　嫁左衛門権佐宣孝　今按宣孝卒後仕上東門院

河海抄云鷹司殿後二位倫子官女也相継而陪仕上東門院
又云源氏一部乃中に紫のとの事とをくしてまゐるなる
故式部の名とはいふなるべし式部と号せしもの
今按紫日記云左衛門督公任あるひとこゝにまゐりてふみ
ふみ歌とりかはしたる式部を指て若紫と稱
せられしの河海抄の説なるべし又按宣孝系圖に
長保三四二十五卒とあり紫日記と合て考るに長保
三年四月廿五日宣孝卒して後二年に式部入内やゝ
すみして寛弘二三年の比より宣孝に出立ち侍り
なんゝ源氏物語作りしもやゝ年の秋なりやゝ

七箇の中に記し侍り系圖異本道長公妾也後嫁宣孝とあるハ
傳説乃誤なり

父宣孝
女子　賢子　嫁太宰大貳高階成章因号大貳三位
後一條院御乳母
紫式部院殿上乳人也云円の位めのと大貳三位云々

父同上
女子　弁局　後冷泉院御乳母
紫式部源楚王の夏也云万寿二年八月三日後冷泉院御誕生ありて
乳母といふ事云大夫の侍方の紫式部うむすめの歌後弁局侍
の位ようゝ云ふ一説ありけるなり
大夫とは上東門院なり孔雀とは惠隆卿なり此事枕
とりかへよ中宮歌も万寿二年の比の秋なりて大夫に
作りしとぞ

又仮上北尺尼長元四年九月廿五日上東門院位右衛
佐奉の所云一の車に尼四人弁尼弁命婦 左と命婦
少納の尼云二乃車よハ侍従の内侍 遊板の弁式部の
大輔平ヶ侍従流の小弁 云播内侍 侍従の車のうしろよハ
宣旨三位 さきにひろ宣旨ハ源右衛門のかみ式部
三位ハ内のかみ の とし大武の三位し
式部 よ大武三位 弁の乳母ハ左てうに母の式部の
名ハ云も悪なくハかるもさきのやうに
かゆ四長元四年ハ 殿 ゆまうしうにや或ハ
さうすありて京にてそれの
さ和の祭 後番光国院 摂政良基公作 云紫式部の源氏白氏の文集
月にそ人 事ハ引 とそ後京極殿も仰 仰 仰

式部京極殿の御詞抄よりてしめつ〳〵しく見
侍 〳〵 事ハつ 月にそ 〳〵 侍

七論

其一　才徳兼備

かぶよ我が才徳ともにそなはる事の丈夫すぐれたる
ことふなん有るまじきて女そなやまとりろこと
いとゝもまれなるへし。さくにいみしくうり源氏物語
を論ずる人さく紫式部が英才とのゝ称しきく
を実説といたさしれて物語の作者も行れなて
式部の局よりものうさ事なり局章はたらく
物語と紫日記とをよみくらの氣象をたり
その事実を考るに度々ともに侍人もをく才徳

悪後の哭婦なり先物語の上にてはなはだしきを
いとゞ紫乃上はらうたくしくあはれなるものゝ
かぎりにして明石姫くげんしの上はんたなきもの
かゝつていく花ちる里のもの語りを後夜蓬の
后はあやまちをかてよく入たしかるゝ所さ
六条の院乃ゆかりくぬけをしてゆかりのの上は
めでたく人〳〵の懸想とのゝしる総角の君は父宮
乃遺誡をまもりてなきゝ姉の婦徳をさとし
妹は不定はおもさずにきをつけて実なりとすゝめ
志しく警戒を志ゝしもらいしもしも武部か

人ごとにしなりとしいへどもうらむらし批評はことなし
てらつし賢しらそてとありそれをうらむ人もなく
他のうわさのやうにのこりなくたとへ人を求人の歌舞は
偃師のおもちゃになりてはおもちゃにふとしきらかの
日記とよみかく甚大抵とかきぎ絶えし
紫日記云すべて人とりどくかやかやこうけんとりちちに
きんするかくいはざとさへあまりでしたればさしに
人となきにあそし世をそうる筋に人のきはのとあら
見てあつめれし
今按人を非とし我を是とせざりしこそ人情

これもそら見ゆへき事なり

又云やゝもせば腰はなれぬばかり折かゝる歌を

よみいでえもいはぬよしばみごとしてもわれかしこに

思ひたる人こそにくゝもいとほしくも覚ゆるわざなり

又云せう納言したりがほなる人のまことにゆくすゑなき事なきまじくあり

（学問がりする女なり）さかしだちまなかきちらしところもひらちにくらべらし（偽作りする女）

ずのおほかることなどでんずる所く見劣わざなりと

（式部）かくい後へてんまは何をつくる事とさへいはつふ人の（呂仕女房なり）

かふるもんにつゞむましてんの中にましてては

いみじうしき事も伸れとぞいでやとありくるまじき

人まねびてやく見えし物わざおもしろき我はと

なりての人の心へそばざるさけのものゝふとももの

うく給ふとふいらしとものゝくゝも人ぞ

かうしたづけんれそそつまずとぞへし人とか

おほせなそおめりそれんより外のはなりぬ家をそげと

見所は光そぶはしむひましてわかる事しふあり

たうくさへりど見所とそげしきふかあるねとむつ

りしともひて（老人）でけしきたゞ人まいとならもそて絶れぬ

（式にまつ對面せらる人の推量し）かふにとりこりきいゝ（式部）えむきそうしく人に

見くみくげさえもくしき面しておもしろきたし

りさ[illegible]ぐらに人と[illegible]もありそに[illegible]けよ[illegible]てさん
[illegible]し[illegible]みる人くいひ[illegible]てあくらしを[illegible]
あ[illegible]しさまて[illegible]ふこと人とるん[illegible]とを
ふいい[illegible]て[illegible]くく人よか[illegible]をりの
とえたとまれよけるとふ[illegible]ひ[illegible]
ふとるひりてる[illegible]ありさ海

今按式部は未詳面の人のりひりまい或部は
えんよ文わ[illegible]問ざて[illegible]て人と[illegible]
とと[illegible]とれ[illegible]てんの[illegible]院よ[illegible]面して[illegible]
[illegible]ハのかに宣庭に初やつ[illegible]ふよろ[illegible]平下ぐら

なる人[illegible]其氣象ハ一部の源氏物語[illegible]

[illegible]

東門院
[illegible]のおり人といとうらもけて[illegible]
ぐど人うをふむつまーうなりにるこそとうさま
いるれ[illegible]くくしを[illegible]ぐらそぐれ
なる人よさそめてられく作[illegible]

今東式部初やつ[illegible]ふ[illegible]なる人[illegible]れい中[illegible]も
[illegible]文四[illegible]ーうくなりたまふ[illegible]ーれを被
[illegible]りとやさしぶりすが人くい[illegible]てこそ[illegible]
作る人[illegible]

さ海はうつ、ぶて人（徳）をうしなふすこんをきて
ものやうにあらわるとりそこしてこそ少人を
ゆもたつしくうしなわやそけり
・今抽は世とうく味しく徳本也戸が来なり
又云ておとこうふぎえぐりわる人いふをそなやをそなに
のを作りめるよと風うく人乃ふを風とあるく
乃ちてとゆりじとぶふ出ワて作りをいてでは
あさましく作りうみしいひんわわみも
でめどなりて作りし（為門作の武部と日本紀の局と名付うしまいよ）
ばけふ人も作へうてめくむらんとぶつしさふ

海望り物のうみよをてうるをぶふうまぬかをて作り
・今抽れとこもめとは風云と思へ
又云などうかるもしも別ふくて世ふくんがかこ
うむ又なてもてけてさ海ふひて出へきぶ
ふ紀をよ抽れは海ふ赤ふくうらひんすの
いとうた紀なうえ
・今抽はうまりなきをよ別きこめりして上ふうり
をうしをえづしぶりをるがふ紀すなうんを又
ぶして出るうい海ふくうえしを風のうきれと
とおりしたうい四へきを事かとこもめとんを作へき

なり

右の数件を味ひ知りたるに、この君定りて、
警戒とはなるべきことなり。節れ風儀用意すべいち
或邪つかくあるべきこと、ふんをとてとむ。一の人
うへに出らつて作りうるなりさされて或邪の婦徳
とてもうれ作り。又宣者は長保三年に卒して
或邪やもめすとなるを、戸女なるは上東門院なれ
東門院の母倫子
寄可敬
言葉しく変つ人乃なるて
通長ひけさ一作ふと或邪はさくの道
うる勢をうえ

日記 寛弘五年 通長云 寛弘五年三月或邪の産の戸口のつるのよんいでさかの
乃文 云 ひとと反の戸口のつるのよんいでさかの
うらうらしうる所に面れ落もまざるなれ反ばりを
たまひて侍随所めして風り水をもせ給ふ格の面
なるを見しれいらうさるなる然一枝をもせ給ひ
て本下乃うへうちのぞもせ給て山の面のいとをり
しをなるにつぶ所さ新の引りしを新まこれとそくて
ところうんと乃ことそそ侍ふふまをつきて硯のりとう
ぶりね
或邪
見しちりの色をとるかに家のつきけ所乃ぶ
今孫或邪我さうれるとかりうるんむ侍給

なりし、かの源内侍が多め給ふとありひて侍へし
道長公近参
白河にいふそもとうし 神主へしんうかや多乃そもらん
御てらふ式部がたとおしきんうちいくもとうあそ
なるへし
同年十月十六日一條院行幸上東門院御所
又云行幸ちかくなりぬとて殿乃内をいよいよみがゝせ
給ふ世におもしろき菊乃根をたづねつゝほりて参る
色々うつろひたるも黄なるか見所あるもさまざまにうゑ
たてたるを朝霧乃たえまに見わたしたるはげにふ
老もしそきぬへきこゝちするになぞやましておもふ
事のすこしもなのめなる身ならましかばすきずきしく

しくもてなしわかやぎてつねなき世をもすぐしてまし
めでたき事おもしろき事を見きくにつけても
業家の幸言と
たゞ思ひかけたりし心のひくかたのみつよくてもの
うくおもはずになげかしき事のまさるぞいと苦し
いかで今はなほ物わすれしなんおもふかひもなしつみも
ふかゝなりなどあけたてばうちながめて水鳥どもの
おもふ事なげにあそびあへるを見て
式部
水鳥を水の上とやよそに見む我もうきたる世をすぐしつゝ
かれもさこそ心をやりてあそぶと見ゆれど身はいとくる
しかんなりとおもひよそへらる
此水鳥の哥千載集
本ものせたり

今按代述懐とみよ武邦仁のもとにあるべくを惟の
尼君のとく　なりさを二人のあるにあるさるべく和泉
あるべき仕の内をふかのもへ
又云寛仁六年の文　源氏乃物語　東門院　道長　なりまへ　反の出ん
例のすぐる事ともいてきさるつあてに物の　えイ　きこえ
いろ紙よかをを　道長云
すさあとあるしきをれを　万人のあて　なるもいしとそれより
きさしをたれて
武邦
人　なりさるしあるとあれこのすきあるとは家しうん
内を小宣者より　の人まのあるはまし　を武邦なり

又云　長保　稱　戸　祭　人　ありとけとあそ
わしさふとせぐわしをめく
道長云
なりをもしるあれなりをふなくそ　紀の戸　てしを紀
まつる
武邦
あなしといりたくそあれ　人　をていう
をやしかまし　沈花芳新和撰　寛五年成ら
今按道長乃怨　年間　てにかく　つ　ひく
いうあ七　出家の　ほかとぎ　なる氣象　尼
なり　さしそれの　負　たとむへくあれむ
日記とくく考ざる人のそして道長云あと

ふはうとて、さ事なり、物いひさうあさ世中せ（笠婦法を語る）
さて学問先達の秋美あり、物語とも兵物流の
上ゆく世話して白記乃逸も及ても今その方種を
かく書作る

白記云さうで物語（武門の里）て学問（所のてい）くらこすをもるざし（書司）
物の琴和琴をつべなりいれと為のあるのあとば
（側）たらせみとといひ作ぬまにちりはりて（侍積）よせ（之）て
（厨子）さうし物とらくら（同）ぬまらびさし入作く
喪毒も知（たり）ゆこと（右）さし（大）て作り（積）ゆ（ば）一
（奥）ゆひみもなくつみて（積）作ひひとつまいあるる物流の

云もいそぐ（出）むし（出）のすみなるまるむつくくまひるは（巣）
物きとみる人も作ばるる物なにこ（高孝卒後）ものとつ（出）ものらぬる人も好ほし
所人も作もなりにものとつ（出）ものとつ（出）ものらぬる人も好ほし
うれらとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）
いて（出）て（出）作と女房（武門の古仕）あつまりて（出）なる人へいかくなをすしを（辛）
をかいすあるさなり（何条）なるる（奥名書）女うまんかあるいらむ（出）せりしか
（往）さ（出）むそ（出）に人へ刻（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）ものとつ（出）
作ものとつ（出）

今振武郎女うて学問好あるあるる幸あるくるるやめ
ようなり作ふと女房ぞ（後）ものが後言いふなり

又云たゝ馬乃介侍といふ人作りすゝろによろこびけるもえ
さうぞくめいうこと（後言）ものの家〳〵風え作りし（一条院）内の上れ
源氏乃物語人よりもをぢひつてきこえけるにこの人い
（一条院内の式部）（作者）（日本紀）ところ〳〵よみ侍ふべきそれ源氏とふさえあるべしとの
ものをけうとしとおもひ（高内侍）いうにいらでうなんざえのあるを
殿上人などふいひらしてにほんぎの（伊周）あるをとも
けうとおもしくぐ作り（式部の里）此ものの（宮中）つぼねとそつぼをう
つくり作りもの（式部の里）ある里乃外のまへにてだゝみ
武部丞といふ人のらういあるく史記といふ物をよみしは
（惟規）（式部）（式部）
ものしつかの人へとをくよりつけをもあるをしき

まをそ作り〳〵作りしるふよりよういしるる（為時）ふるをそうく
たのこゝろをしてぬこそ幸ありけるとをうるにしるけるを
作り

今掘ぎふも男子なるまをしふ京今ゐびるさをなせるを
（東門院）（紫）
又云云れかまへて文集の所こゝろまを掘ひをどしてされ
ちりのまをとろ〳〵ものを書しをふかゞひたりしぶいと
ゐして人のさゝふ見しのくゐまゐ（寛弘四年の）るをしの夏ちり
楽府といふ物を二をとをとをどけるくをとを（中宮）へをて学え
ふせて作りもかゝり作り

今掘ぎ日記乃題をて武部ゝ学寮の厨子をとをら

乃爾頭さし入くと云名書よみしあり白日平記
史記白氏文集等ふ書あり此外
三史五經のうちくしさと佛家の經疏法家の日記
紙中雪部玉篇記と
あしくうとうとなりう和歌の集家々集下 古今物語 三經
爰法師曲あり世者張合の事 裁断 法師
通しう邪道日記并物語の所をとるべ
〜惟親よりもあやしさとて物〜と
なりふる童女乃時より 猛悪強記して天慈の
戸器なりかめ大きなる厨子婦なり陸も形く
後ろ髪 仏ってう作りくんいとものしくて

作ったれど迷ひ戸とうらひひらら受婦人の事
物語多い容易ず着過ぎ入りて

其二　七事共、具しり

父為時ハ菅三品文時卿乃弟子にて当代の学者まこと
方とをとよみく集めを撰されしり先と父として
生れし其一　元惟親も拾遺より初く来の集りを
乃ち歌人なりそれハ地なるひつくとそくよみとりかい
つもるく不とを式部ハあるしきまてちとりし紙
みをハ聡明とのつ〳〵神童なりもし　其二　たさ
あをこ雅ハ世ちゝことそも女学問とどゞ氏もの
なるに彼学宗のさ海をかりふよ折つゝき和漢乃
籍書とよる人者楽節業よをこたゝりしとる

千載集云上東門院より給りなを里に出りける比
女房のせゝそこれつゝに筆はしるよまゝでんと
いひて給りれをつゝけ給式部　落ちけを遠つ
もとれ出乃事ハ式部ハ人の尋ん氏筆の
侍授ともその楽乃とゝ　其三　禁裏
院中中宮　東宮　親王　摂家の御ゝにまいり
あをひく元日節会よりをめ退儀よ到りまて
恒例陪膳一とをの公事　或ハ奇合　絵あん勢
吾合　蹴鞠なと優美なる事ハかゝりに毛四るこ
肥ゝり　其四　時代もあまり上つゝとる氏又裏世

なり中葉にして文質ともなり世に世とうり其五
須慶あり住昔かして泊瀬いし山宮治大原野
横磯野あり川ぐし川沿かん清乃とてり小姫
乃奥くゝ田の谷に歳の山路の風をと安ゆくは
行まり有まこの名所四跡を歴遊しうりと
乃名芝皆丈氣のたをけとなりかの姫は山
そよめる所に父ゲ住國へてりうるけなとの作なる
乃し 後古今を忘つつ山と あゝしきけしして 名ばいふなをゆに志づのかのこいと
後作り名 芝或ア 志りゆんゆをになくを志乃山世をむうる
書たいうゝ志ゆゲと 姫は山い近江後井郡し
乃をに常陸乃事と申るに和泉常陸介為信或ハ

母乃ねゝりなとと学ゝるゆ其六一部の意と詞と
なのこうそいかくこまゝうるものなる狂女なれとを
れ乃これ是ひるゝ事まして事をてゝ多り女とも
上のふなる人ふ下げまゆつ山ぎをとり拾をびまして
下乃をざゝいいぐ上をなひ及りんゆ武部ゝ角く
中のふまをれるくなりひいるゝ人生於一其七於
とゝひろあへゝる武部ゝるんでかの石山花冥加を
かゝぎとゝとのつゝ世相流いて紀かゝ一紀書
なりりをりしかるも後人の臆説ゆて武部を
ゝゝうものゝいるへし一右の七事ゝうあひゝう

人いかさまに有りしけむ　帝はよしわけなくのもれ
ぬべきものにおもひうんん

其三　修撰年序

日記　寛弘六年　三月の文　云、右衛門佐の宿所にまうでうひ物語源氏よかるべき
ものにぞ侍やとて　ものうへ　まいりくいでたまへ
人々　侍ぬるのうへ　いまいくいでたまへ
りんとぞ　ものたまふ

今按ずるに　物語を作りて　みだれ　わかれ　流布のもとなり

出でてまゐりぬ　宮中に流布して　侍ることこそ
よろこばれ　思ふこと　侍　又日六年　三月の文　云、一条院　内のうへの源氏乃物語人よりまゐらせて
ものしめしけるかな

今按ずるに　紫式部　日記　記しられたる　ことなれども
さしいつる　光　とて　定めて

又日年云　源氏の物語　東宮院　おもしろ人にあるを殿の御覧じて　遠長　とて
今按ずるに　河海抄に寛弘乃始めとかせるは
誤りの文によりてなるべし　いかさまも長保の末寛弘の
ものめ式部　やすみて　里に侍りなるべ

作りそへ、寛弘五年は道長公四十三歳にて、彼の
艶言のこゝろ、同六年に後段のこゝろをそへ、
終に、なとかりの老姫君にて、ばせを
づゝそをそへ、中ごろ、中将なりしとき、
なる女にて、栄花物語後上花尺の巻より中宮威子
三十二になりもてゆくとそ、
会し、忘れて物語の武部三十歳あまりにて
も化したるなり、やまとかこゝろに秘敏
なる人の行事にしたがひ不思議切とかたるのみ
此物語もかりのかくらけるものなり。

後の人あやぶさせれつゝを以て例とする奇妙
不思議のかりのとかを、
父為時がちゝとそ、或は佛法後の加筆なし
さゝの臆説とは、
書を考るにとゝろなりといへし、或人の云
栄花物語南北の別、長徳二年の文は円右伊周公
のゝゝとほむるとそ、かの光源氏もかくゝ
ゝりそんと尺なるとそ、
世流より栄る物語なりとそ、世に流布しなれ
こそ、赤染衛門も伊周公を源氏にたとへて、

寺けめり、若さしかくして為章置て栄花
と赤染が作とあるは作とも思はれず
なりとの栄花の赤染や紫式部の人古記を
見あつめくさ問はとらへて全書と
なしたるはとゝめ初花のそいやうて然見を
見て書たり日記は赤染為章細ていつを
武部斎院中ねなとの評とも書しられを
さ人と存生の日にい世にしりたへさ物はなを
赤染をまと同時同学の見記をありもまに
ゆとゝく初花の書しを作へしやうく

ゆ人へしく又布しの給乃そい堀川院御世のま
と書しうり赤染ゆ存命せい百数十歳なる
なしいまとさゝに長寿の名誉さ沙か
なは赤染の作なる拾遺抄ゆ事長を
さしを記給へしく折ゆ人て保説妄傳ゆ
まとを作書を書くしくゆみあるゆ
問へしとゝ人なはいぶうを新して
まて也

其四　文章無雙

物語のうち和歌并詞とも不可勝数古今伊勢抱沈うつか
行うなとは古体とも可申とおもはるるもの
みやびたるくおかしく吾國の風流をよくしられ
たる人にて僉事ぶりもよく
しられたるものあり全篇は富貴温厚の氣象
あり中に山林出世あり
市井田家ぶり貧困哀傷あり国情風俗を
さぶらふにて情をうつし京ぶりとうるまの

あり其人みむらひ主有るあるあるうつし　全篇を
傳ふるくゑとのつづく序乃辞あり跋ぶり紀
ぶり詩あり畫ぶりて諸辞うるはしかのく
あるの者乃思定い法ゆ奇妙なる物なり為章ある
主章限とぶりたゆ紀ぶり序して云ふ論破あり
論義あり論脱あり論尾ぶり廉より細小いり
俗より雅ゆともむる態より楽前ゆ序一波洞
頓挫照應伏栗などよろしの文法とのつづく
ものいりの氣脉い悠揚として寛裕ようの
文勢い固活ゆして婉曲あり　芝不定のこゝを一部よりうて此点を付へ

もと漢文にて記作りたり史記荘士韓柳歐蘇みな記と
なし女乃筆なくいめつてふあるしく武部は
誠に古今獨歩乃才といふべし いめ〳〵より清麻呂
とかくのうれと清女物云ハ才氣使ひ多くして
ちらしたる跡あるよあるさけかわるものなり
同日記に論せしかく序の略 或人の云武部が
文章とハいと仮名なくも実録をかぞへて女用ち
作り我作とをあしらひ海塗の媒(ばいかいのなこうど)となるす
いとと哀なる事なるすべ 答云是すなわち
為時の男子なくもたゞ嘆なり男子なまし
ハ

一部の國史を撰びく百代の亀鏡ようなる作りてま
女なれども英才つあるよおぼふすと得をしてうれは
似なつつ こ初後作りて閨門の風儀用云教
しうがするつう武部なり物語と見記とをみて
を氣象とをるに武部ハいかなる甚しき事代
せる人なりけりしうる事とをうるる人也
り実録ぬ作る事武事なるハ女に似つつ
うを是こと事なり異さらなるすなり
志うハ武部の平生れ用意とハ相違をしし
仏志ゆて実録とりめハ彼日記ハすなわち実録

なるゆへ法花初花の中に全くこれを出さ
りしかとその日花むしろ定めなく数十年乃
至にありぬへきをもとし世にてさいさい不幸とい
ふ　今俗言日花は僅よ　又いたく此初花を
を面とする人に成り風儀用意と云ふ所
なのこもゆとのゆとく一箇の好人となる
り　海藻といふ　國風は嫁奔の詩を載れ
ることもあれとも　嫉妬　勸戒の詩
歌の徳なるよりは是を捨てと寧なりと云
とも思はる思なる高きに勸戒うつりがたし

していふかたの事たとへ思風にかなひ作る者
此初花なんをく儒伴ようにして近く和歌の
人情風儀をあらく美刺を言外にもせれも
感味ぬくしてとのつすきくしきをと
あくこと実くしに花のすぢ屋くなりやすに
花作る武部と云ふる人に海藻乃ちをも
へし武部と云る人に初戒のいたるなる所也
これを此初花を奇乃経典よ備へ作る
ちに作ぬと云に或人ふかけて吉田いとこび
崇　厳忌
たりこと人のむきれる道を直諫に入がたしして

うのやうなる風諭なん病を起こる第一にて
きふと称して乃ち意に作りてんといふ

其五

作者本意

代物語もつかう人情世態を述てうみ中志ちとの
風儀用意を志りて事柄好悪によりて賞刺を
設まあらいたる人をてよりて行を定めしむ
大旨い婦人の居り風俗をとゝもとのつ
かのこれいまめとなる事なり記りもちと
奉て例をは桐壺の帝代色をなんして更衣に
寵遇すぎ玉ひ人のそしりをもえらぐらせ
給ふ世人なりにもきりぬ人きゆてをりと
上達部う人ちらも天の下れてあまを

みかどとゆふ帝徳のそつこと世事あしく
位代のみうしとを諷諫しまるにあるすや且
源氏乃君とゝさうて拘みなりして世元服より
以下あゆ事も東宮にとゝばせて自ひ
よりせもの儲位とゝうく〳〵まうしあてさせ
給ふ〻歳んのあさきしるせるや弘徽殿の
とゝばらかどくしこ石のあし給ひて帝れ
四あげきと事ゆとあるぞ美てけらるは
后妃の出いづくふかおうしまとゝとよん
こゝ〻ふ女御后より以下うの風儀有之ひうう

尺給ひとゝ又あしごゝ沈のうてこ品ひうひなし
沼よとゝ君こ乃君れ恋ハ一篇乃女誡をれを女とい
ゆりよみあいとゝこゝて又うけゝんと彩語の花の
囲碁のありこ海園中りあをの衣といぐこなこ
教戒あゝ給ものなりうの宣様が母こんあしてやこ
なんとありひとゝこうの貞操いうこきものにこく
武弟の志なり又沈よ夕新がりてあしこる廊乃
かうかきすひこるゝ〻こゝとゞゝ
たりりぬべしこれハのまりやいうふ名の平作ゝこて
ゆゝありれこ様ひうとて情あふ

身まりぬ光とゝく女はゞ行人すさく
事代りよへし源氏のうゝんれをひみ
名人をいとつるなし我山氏を堤のそて
より高く笑ゞくいんらまゞひくらい貴なれ
微行といまむ惟光がかゝる道まわて源氏をもりる
飛い行ゆくを近習ゝる人こしを行人ゝ
光より年れ老こ皆この服をつをく後行い
其人の行跡情態かゞゝにうつをおく妍麗の
ゝ事なく世乃ひまめとなりゝん事化を
乃ゝ忘れゝく後作よいあゝゝ一一中ゝを

夜壺と源氏の化して源氏をうゝ後ゝ伝ゝつをゝり
てするゝ源氏執政し信ゝ内ゝ小石家の伝説
ゝ国相年代身ゝ知ゝ事ゝ光源氏没年諸説
ゝとゝむ物語ゝ人の飛をはすて風
人ゝつゝゝ人ゝゝれゝすゝ風徐ゝく
袖よいゝゝ綿ゝく頭をゝゝのゝひなり
嘗乃光ゝ云其人乃ゝ人とて育れまに出ゝす
ゝかけ若ゝ世にゝ人のゝゝ
人ゝゝとあゝゝ多ゝゝ後乃世ゝも
いゝ作人ゝゝ年ゝゝ如ゝくゝゝゝて

いひ金ぐで申すなりなどこそ古きまねるを論ず
やうく成りて或部ゝの志願と成りし物語と
すべて作り事とのみこそ云へりそらごとを世にあるし
人のうゑを述て勧善懲悪をぬくしこゝろ此ゆえ
をもつぱらして論語の書と成るそもがゝ今下れ
事なり又因花言葉とのことりて花をふ人の歌乃
利祇（ここにぎき）といそをして（つまま）柄室のかざりを論する
おもしろ（ちゃう）一部の因花といひ警戒といひ
花実かしをへ（ゝ）ら歌書をしを此道の合体と
いふを思（おもすき）秘よい作りし

其六　一部大事

冷泉院の御事ぞあるひい作り物語なりぬくばを
するすゝめるとしひ或いは子細ありなるとこゝろに
こゝろを秘し或いは好趣向の見めくさゆく一部の
物語をしてじふ見ま用しゝすると中ともがゝも
作りを示或部ゝ中云をゝ云ものゝ云へし（序章）
試よ今拙を云ゝて識者の是非をもち論へ
桐壺巻云源氏の云ゝうへのつゝにめしまつゝせゝん

星すこもえて結ぼれたるうらはの友つかの
はありこゆをたくひなしとおもひなりひさしてかゝるあん
人をこそ見わかぬ人なくもおもはれしけるかさて
かくれこゝ伏柴とやらけてもねつゆふ浦風
ゆりしはちすに半分の蓮の花をあく情姫をこゝを
紅葉賀にて出産生あるひの老に立坊にたつて
あく御帰位これを冷泉院と号もさて藤壺の
きさい東宮居の信れ寵奏して朕に賢に源氏乃
御子なりを始く去るりうしも御子同食
給ふへき人もおさまく出るうゝ書き例を考給て

よく御学問とせう給ひつゝ学ぶくのみをとれ
らんするにりろこゝまかあるこゝ忘のしくもみりり
かゝしき事いとおろうけり日本にい文に出らんじ
うる所なりたとひあらんしてもうゝに思ひうん事
とおいりでうはゝ去るゝ乃あんとするこゝ
若菜下巻ゝ柏木蹴鞠の女三宮へかゝるを源氏
去り給てこゝ思乗乃あまいこゝ
みくれ御妃とおもあゝ乃ひたびむ（皇の女九進ゝ）ゝ者々れとれの
きこゝてゝこゝあをなりうゝづくといひて我ゝ人も同し
居るれつゝふまする御りゝんをかゝゝゝあれのきぐん

かぐらゐ（こつぼなり）女御更衣（こと）とあるすじかくる
ことにつきてかとかりうの人もありんだせかるべきうも思
折ふしに見てなきたびる事も侍とおもはれたれど。
なるあくまうなる所に紀いさんもまじらふ所も侍んは
をもしもあくに侍りぬ（可悪）ぬきれあるめし（人びとさうの孔を
しでするかみの侍やをさ（はやをさ人）にんだえんぶりそえ変づくの
紀ものすきそ侍るん（密通の人）しかをはこそ（世忘）れ侍ぎことふ
なびきとのがぞくあるれをはたてをれの
いくともいひろめ侍（私通密会の祈祷）ものるひきむん（加茂祭三条通り）をふ
出さへさ事にもあるべなどるべ（桐壺帝）みぶくにつきそ（乱院の

うんもかくいんよいをろしてをぶとはたそせ
（昔の源氏の恋つかをとるをしるを）
（源氏の悔の化去のかを）
猛びをんなりへしうの世の中こそいてかそろしくおもま
さあるまちなりを
今按此世物とりふる昔の事ありても又いをを世のす
みくも武部の尺やしる所を感じて申なる所
丁寧反復ろの意あさうもよしんたるをく看をを
へうも伝説規法を二条の后（業平男通ひ給ひそ）後撰集に業平
御母（元良親王を事そさうり）栄花物語を花山女御（実資公よんを
兼家敬女御義忠反
芳御母通ひ給ひも）これくのれうをくんだをもをうびて
私の祖ざをふるびをなる
をうをくしされも幸

みて初のまうけ君の御後とうけ給はりしで
いらもうけ給へきまうて給りまして皇統御一代にて
立原氏故源氏なとふまぎれしあるを吾國の御后
ものうち事あり東海とあむ番仲連御りに
へしさらい故重にて源氏のかうして冷泉院とうた
給ふ内にふ有まりて記あるまりあり源氏に法師の
罪ありしいとも皇統のまぎれもなくなる
かるにあるも桐壺帝の御后まいりくるなり
孫なり神武天皇乃血脈なり伝路の家廟その
祀をうけ給ひ一ふれ蒼生その改とくてできなり

それすら後宮院の御後とすて朱雀院の正統
ゝ言いまとこそ業にあるべくとく
一旦人倫乃うれと長く皇統と御さるれとつまの
きりいつまのかろうへしや断業をりがてと
いとも低下れ家とていく源氏の飛をきてさる
まもて皇統乃ものあるさる也とよ給ふ
此一武部の立言とてうへしけふ
用意始りき武部の南附文中あと抜高する
物語よんなりて主へしや此遺言佩論よくろ
つを給ひていうもとくの初のまうれを行うぬ

ぬせを作るべしとうりせぞいうとうりしさ事を
ぬべしかの二条后なとの養事をとりへたれて
ろしさすがもやはり上に上るを原の熟ないらぬ
式部なんなて私通の事ばかりをとをまく
するなり世下の又薫大将のまきれをそ見た
あるべしとろこしにいみとうりしさ事多りり
きりとい史記よ秦の始皇ハ実ハ呂不韋ウ子
なり楚の幽王ハ褒姒ウるなる事をとるとり
讀史管見よ姐致堂これを論して云古之有國有
家者雖買妾必擇其良羌胡無禮義廉耻尚且盪覆

正一世惡族類之麗也而況諸侯乎何贏楚悅色納姬
不疑其故遂使大買生販心焉自是有天下者蓋呂
姓也柏驍宗廟至是而絶云云鶴林玉露よ羅大經
もりと論して云秦虎視蠶食大國不知六國未滅
而秦先滅矣何也始皇乃呂不韋之子則是嬴氏為
呂氏所滅也司馬氏欺人孤寡而奪之位不知魏滅
未幾而晉亦滅矣何也元帝乃牛金之子則是司馬
氏為牛氏所滅云云他の書乃事そさへあるる
よりこれ況や胡廷ハ皇神のさへをそ絶ひし
よりこのとき万世一系ちに論ぜしそ事

なき事なれども世の世にいと女御文衣のうちにまろびたる
なもうるはしうして帝系れまうしもいでさせ
給へしやとをくおとむばらうし侃論と金の武部の
女房とも乞の生質乃美と学問のちゝとうら
あひて識見とのつゝ大儒の意に能とゝ
ふ角しまさ美方の事の天道好還の理を
志めしうるまむさ殿大位の業しおれ北一件の
一部の大事ありて論する人のさはあるへき事
なり武人のさはもにやさしくなる人ゝ
ゝる知識とのつゝにはしく道理と設て論を言事

武部の事志ゝはあゝさらへしやゝ 答云 愚云なとは
女ゝいとんうゝに世にはる事れはなるさゝ
つもそ世にはゝぢいゝ世もはゝ人はゝなひ
ゝ世孫とはすゝもかゝあん人の耳には用も
こまる事ぢゝんゝ多ゝうゝ日記云すべて人の
ないゝふすゝんとそのゝふゝ弘を
ゝゝしてゝゝ人ゝゝ世ゝゝくゝしゝ
やすゝ又知識ゝ始ゝ源氏と友達の意事を
いゝも度ゝゝさゝまにゝさゝ論ゝはいゝ
論ゝゝある中ゝ記あゝゝなりけゝとゝ

しる、氣象とみるは此の一部乃中に人この婦徳と
ほめたること海と日記よりも古深少納言和泉式部と法人
伝評しるされたるなく芸よりとりわけ〳〵ふ
たまひ物なり女なりさるに書出せる物語なし
むとしるべきくらの物語のものと見給ひて芸とも
ぞ和泉のなを忘とはくらべて世で消息を楽の
むるといふ事なるべし理つよけるともの
いひぶりはやすらふるに人に成さしく書
なれる事女乃業なりて去りとよれもぐ物
ものなりなのれらの物語しきわのもくもぬるわ乃

ここをとよみつるにはなれなりと寂蓮法師のいるも
まひあるを〳〵一道の代乃先達のよみるを乃
とし〳〵も人〳〵命にあるをだれでもぐるのやし
〳〵思ふにたとうけるなるとの歌あるとかおく
此物語は此の絵書なりしく和泉家の至寶
なるべしとて〳〵或人はいのうかつく

其七　正ニ傳説ノ誤

宇治大納言物語云越前守為時源氏ハ作りたるなりこまか
なる事ともをはむすめにかゝせけるとそ后の宮（上東門院）此事を
きこしめして紫を召出して此源氏作り
たる事を問せ給ひて侍てありてのち作りたりとは
申いつまゝ問ことなん
古名抄云大斎院（村上女十女　選子内親王）より上東門院へ珍しく
なくさみぬへき物語や候と尋申させ給ひけるに
紫式部をめして何をかまいらすへきと仰られけれは

めつらしき物は何か侍るへきあたらしく作りて参らせ
給へかしと申されしかは作れと仰られけるを
承りて源氏を作りたりけるとそいみしくめてたく
侍るといふ人侍れとも又いまた宮仕もせて里に侍り
ける折かゝる物作り出たりけるにより召出られて
それ故紫式部と云名はつけたると申はいつれか
誠にて侍らん

今按此物語作りし事始よりたしかなる
説あつて人々ことにまかせて問くあり
いひ伝へられしこそおほつかなきことなれとそ侍りしと

かゝる所業を行ふ人は世を誠
にすてゝ真俗なりまゝ大綱は為時俗にて
おはすれども紙むすめにうとくうとくはあ
一向に文章のみうとくとゝ思ひ給へれ人のよ
俗人なりしかゝれ意と思ふにはとこにてはいとも
よりは事おろかにして拾めて婦人の趣向なる
べき道理なれども一人の事なりていとそこなはれ
なくなり一部よりてあるべくよむ人は誰とも
此説は内ふかくそなはりて弟子とする事極
無備と七事共異なるをもりつゝ文の力とかゝぶ

とゝもさは地流はいかゝ出さるべし　是長保寛弘
乃比の后附うゝ〜卒しくゝ知へうゝと又彼日記は
りとう父方とかゝさうはのうへ見にまゝせうゝ
しうものゝ孔とゝもの事柳この地流はとゝうへしゝ
日記とゝうゝ〜ゝ人は文ゐおの妄流は迷へうゝと
文住の事は年譜とゝうして考案に絡へ〜

一条院
長保元年十一月　道長の長女彰子入内后藤壺
十二歳是上東門院なり
二年二月　彰子立后十三歳

三年四月廿五日　紫式部の夫左衛門権佐宣孝卒

四年五年　寛弘元年（長保六年也）　二年三年

今按式部の中宮へ参りてのち此二三年の程なり

御日記の文と思へし

四年中宮彰子　二十歳　此夏式部より文集の楽府を

写しまゐらせ文前より出でたり

五年中宮二十一歳九月十一日御産（後一條院御誕生也）

紫日記あり七月文云（中宮の女房）

人々そろそろ物語すると思ひしかしかるやうにてかくさせ給へり

此あり高などのたゞなることを思ひ世のなぐさめ

かゝるかゝる人々とそこそこ（紫日記）

とが記きたゞ（白と）へなく病げ給ふにもろか

あゝ記之

今按式文と味ふる宣孝卒して式部やもめ

なりて後中宮へ参り初しが大なる世づらそ

れ〳〵参りての里住の人のうれんより世のなぐ

さめよい以下の述懐かりしこと文とこそ

九月十日御産前日の文云（紫式部中宮の女房）大弐こんの君小がれの君

文の内侍弁乃内侍中務の君大納の今帰大式部の

かゝる夜の宣旨よいと年たけたる人このかぎりかそ 此人しは宮仕に年へたる人也

四条三位ゆき給ふ折に 心を内とりしうきもしれたることわりなるに 式部ハ新参なれバ

又なりなりて我なけれしともおもひなくいみしとん

むかしはおかしき也とて

今按まさに又なりなりて経たるさは式部新参なれはこそ 式部ちかく里へかへりて又参りたるに 初参の年

十二月廿九日ノ文云しはすの廿九日にまいるはしめて

まいりしもこよひの事ぞかし いみじくも夢路よ 此の年の十二月廿九日なる

まどはれしかなと思ひ出ればこよなく立なれにける 今ハ 宮仕に

けるもうとましの身乃程やとおぼゆるとあるも

今按初参の事を思ひ出たる詞にても新参の證

されはこそこれを物語と日記と読みて式部か気象

をしるの時宜を推しはかるふたつにて大斎院より

弟子ハ取宮にいられん時中ニ又式部をめして何とか

まいりすへきと仰合されんは新参乃式部かし

ぶらてめつらしさ物か何の待らへきあはれしく

作りて御覧せ給へしとてやうてこれかし

その後に作りて此物語を作り給へしや一と云

文字をとぶふしるやねかなる式部か謙退婦徳さ

気象をしられん人の妄傳なるへし 父為時ハ

ともく身まかり夫宣孝も卒しけれ宮仕も

せく里に作りけるものすみのつまくにさる物流
作り出さる所きこしめすくにさるれるれより
武部といふ名ハつきこさるなり〳〵
河海抄云西京大夫安和二年太宰権帥より近
せられ給ひ〳〵なり友武部なきかくしよりてこれ
おけく法大奇院より上東門院へめつらかなる作とて
しるしとて法名にうつかく作とりこの物語いめるれ
きれてあるこ〳〵作り出さるくまつさう武部よ
伊れ名い石山寺み通ひて〳〵事と新ひけるに
物〳〵を八月十五夜の月湖水ようりてんのすみ

ひてるまに物流の風情をこにうしるさと高ぬ人
と高仏前ま有名大般若の料紙と本ゐるみり
うきく先達ノあ〳〵のあきと手をしめきり色に
よりてすまれそにおよひ人ハ夜なりとおろ
出くとふ作りとうや仮み罪障懺悔乃為に般若一
部六百巻をうつ〳〵手うく書〳〵けり今にかの
寺にありと云
今按に此ハ物語ハ紀淑方の作なるにかく
作く妄作をもとりてもすむいふ〳〵く意
作作者のめて紀よつきてハ人名と信用

一為章朝臣の事は一昨日一二申上ぶ
ありてさるべんなりとなりひけるめれとぞ
事いとゆゆしく服ものくわかされて業平卿の
源範政朝臣の提要といふものにて西京殿の北辺の
此武部はおさなくしてしばらく前乃事
なりしとぞいふ冷泉院安和二年より寛弘元年
まで多く三十六年なり紫日記とはくらべて
安和の比武部たるべしとぞいまさ褥(むつき)なる
つまらぬ作りものなりとぞ和泉殿のたまへ
なりといふ事はもはつきまへぬ事なりとぞ

原氏系図の事は稱名院(公條公)内府も八月十五夜石山にて
かの武部の事をたてまつり前乃守武流なるべしと
いとゆゆしきあひ法なり物語の風情
そなはりけるまくはしれぬことにてすまはのよ
事なりしかとも武部の仏乃ならひとは彼の
人はいかなる作りものと獨笑をしたり多く相重
なり法華に事下しいとゆゆしと見る一一為章卿の記録
この河海の説と信じ彼自業乃報乃尺多く
て石山にてあひ一時坊ぬ遊宿して事成
一尋さぐり作りしにをくそをそう作し

但源氏の間と芳ばく武弟の畫像を去この比
乃机硯をと殺しるいろ迄此世行人の好事を
又云長後深に手くりくして五十日惜るをしてをりしと
校本細云弟成てる清書をせるはく奇院へまいりせれ
けるに法成寺殿白奥書をかしていたく此物借せり
らん武部の僧と乃こをりくりて此丘尼をかるる所也
今按正徹法師なりと此流と信して某武部の
あとの繁として友氏也者御堂殿白殿をかく
りひけるとかげを細流抄よい此奥書の事をひるり
うをあんびしてさしもの自然乃事なるべしと

あり后章の料簡をいふ自然の事まてもかく一旨
妄信とりへしろの為ふ上に載る所く皆りてらけ
かさそして此奥書の事を又ありくへ知しし且道長公
奥書かき給ふくいまこ殿といそれるくおしさん
祝の事なるくこそ光明丘の河あさらを又寛仁二
年に道長公五十四歳入道して法成寺にはりるし
さんはをとひ奇院より上東門院へ武部の先生
作り奉る源氏一部伊勢物語をはりとても入道殿今い
和さを波物語一のいんんをかくのとくいそき
なく我慢の奥書かきなくへるもこれ奥去とよ

地のいそげるさ武部ノ丈とたとして自慢の事ハ
八道殿の御屋敷なとものこと書ぶ白なり今下れ
人代物語の奇妙なるに驚そたゞ為もよろしぬ
たとうまく知為
細流抄云 凡日本乃國史ハ二代宣孫光孝天皇
仁和二年八月まそれ事ハ記して主後の正史
此物語を記さふ眼前の帝より さるそんハ上の
日本記ま書ーつゞん忘なり也廣ま所為
なりと
今按此物語ハ作ハ思事くしきたり

なり色ハ家花物語なとの作ハ此物語ハ
料為用ひて
又云此者の如き人をして仁義五常の道より
いま絶よハ中道実有の性理を悟しめく出世
乃名根を成就すへきとなり
今按ハ此もまことをしきこと称なりこの作抄地を
或ハ荘子ハ寓言よりづもりといひあるハ史記九伯
とうつりといひ又白家よりかとる人ハ天台九六十
巻よりそ〳〵ハ出乃法門とをひよ学ぶ事
儒佛乃家〳〵ハ乃ものかとにまそ武部ノ

ほうめんにあらぬ道理まるもそのりを本とせり仏の教ふる
中ふとのつゝ儒仏の道理をかなひ僧家本朝の
故事とかなひよせるるもの多しかるを本意儒仏
乃至あるゝんとにはあらず実録みるべしにもかの
祥をを忘と得て論ずべくなん
實物集は妄語戒を犯てをまじく業武部の虚言を
ゆるく源氏物語と作りとる罪よりて地獄よりて
苦患を乃しりて化をへよ源氏物語を破と
すべく一回後を本くそうぬしと人乃愛に
乃しりけりとて歌よりぞもより合て一日修うをく

供養しけるハおろかふらんものとをく
今按これハ義中れ高想なれとをく論するも本
乃費をれとも新勅撰集釈教部を乃て業
武部しあとて結縁経供養しけるハ
茶毘を翰品と造り作り拾六観経家家 法の雨み
ふれりやめまんむつまきはつもしきはの業なりに
こいふ歌と載らまし しをその一日修うをて供養の
附勧進の歌し乃て又表白といふものをを
特をて作もるめやをそうをの作き義とやそうをの
実事にあり人も行て武部の風流教戒乃

物語とかゝる妄語の罪をもせるゝ勿れ論はうとて
てゝこ事ありてゝあるべき人のまとひとなるべし元
法師にこゝの料簡脱説あれども中のこゝいと一多
只一二をのぶべて他を例しまつりかの宮治大納言物語
なるべきものなるにうしすゝ妄語をもるべし
とゝいまして後この説ともいうをとゝ記事おく
を作りすゝ物語乃ゝ人ゆくその氣象を細
ゝ祭日記乃面ゆくゝその事實を考作ゝ
あゝまりゝくゝ

ゝゝ為章むゝ作圓伏見殿實悪院真教親王より作しゝ付このゝ
物語とおのゝて中務卿宮仲明王の海釈をこゝ
先考内匠頭定為朝臣乃周書を作ゝ若ゝ中院通村ゝの清書なりゝ又京亂法橋
烏丸資慶ゝの清書の説義とはゝ人ゝ中院亞相通茂卿の
清説をうをゝり水原河海花香風はなとゝ
法師よゝとはゝ作りぬるものゝちあづまにゝ向し
水戸侯權中納言光圀卿の彰考館より作りて李部王記
小右記權記左經記台記玉海玉葉明月記等
添豊後日記
ちゝこ世の二水記などゝ一百部あまりの舊記を

まゝく有実に於くいやゝ不審とるけ作りられと
堅家のなを忘れなれいふうくの作りしるに多まく
紫日記を得ん考しくよりこうれ章院とうろう作きよ
とのつゝ芸文解と情慈と物語の類に多くを思
事ゆゑうとうてはは七海と草稿して櫃まるさ作り
うに多年雅俊はやる律の文はは物語
国珠尾契仲あぐりのぐりて万葉集の不審を伺受
し作りしはあぐはは清乃後まる及ひく思按と符合
しる事ともおゝく作ふ蜘物よ友をえうちよ
ようこひりひ物へてかの草稿を清書し作るた

なりはたし先きは此歌と今ゴるごゝ此七海りを
さいあゝく作やりおゝく作んまゝ又後の人れを
あゝあ西し物よへし
むゝ記のゆりもしくあつまくも
なゆうけまよゝむさし物くうゝ
時よ元禄十六年重陽の日武刑小石川の寓居
みて志しかり作り思

安藤右平為章

芸の道ありに学ぶ友人のかたらひと年山先生と号して
りと吳竹のそのつゆ移ぶしつ都のうちにうぶら
中比より彰考館よりてかゝやもとれみてふ文を
むもとゝ行まり此七篇とえらひて芸家の陋説に
あり初流の事をとゝめさゝ事なるこゝろをた
おとゝ子孫の下つゝにむまれく武部とをるす
かくれとゝ事あゝさい御ゝ先生ハ芸家の物ゝ雲と
いひてもし資紀も曷てゝ同館ゝ作て物語
折物ゝの事柳中仙言の奥入ゝゝゝゝ也足元紙江
ゝ事ゝ事あまゝくちゝもろくゝもむとゝとを

なゝ一ゝとれねとゝろゝもむゝしゝ事れもけゝみ
ゝ内ゝゝゝゝゝゝゝこの篇ゝとゝゝゝく武部ゝ婦流の
内ゝゝゝゝとゝ七事のゝゝあひゝゝゝ冷泉院乃
ものゝ内ゝゝの大事ゝゝまゝくゝゝゝゝゝゝゝ
ゝを絵ていよゝくゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ
行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ことを物語りてにそ多〳〵作り忍

香竹居伴資能

年とりて思ふ事あれいくしわろ
なれもしつ元のこゝさ泊さりもり

年山先生安房氏ひろく儒佛の書をよゝあまねく和の旧記
紀書とりて伝をつゝあまりに源氏物語の七論をえらひて
式部の女史とあつ〳〵物語を奇特なれ経典と稱せつゝ
なんもふ元通説の論ゆゑて古今未殺の伴なゝ〳〵
されてあまこの物語の眼目とありて学のゝ人なるこゝ文
をあまたい此論なり予つゝてこの論序は伝つゝ〳〵ゆゑ
のゝ仏てゝ校合ゆつゝてに彼史と和〳〵作り名

藤原治之

一りとゆ根もあるもくもつ元の
ちゝ内よゝ恵世さ〳〵乃ゝゝ

茫家七論一怙水戸相公家安藤新介爲章
所撰奇詳確論可謂物語指南也翫味無飽
寫以藏之

尚友軒枚月叟